四つの季節の鉄道エッセイ（夏）

音頭の聖地

石田　千

おととし去年と、真夏の夜の大阪で踊った。

民謡が好きで、旅に出れば地元の唄をたずねてみる。いつか本場で、河内音頭をききたい、踊りたい。長年憧れていたのだった。

大阪は、いろんな鉄道がいろんな駅で連絡していて、便利でたのしい。友人と遊んだり、出張で行くうち、おなじ宿に泊まれば出発地が定まり、路線図がたどりやすいとわかった。

アメリカ村のちいさなホテルに着くと、さっそく浴衣に下駄ばき、からんころんと町に出る。たのしく踊れますように。法善寺さんにお参りをすませると、なんば駅から近鉄で、河内音頭の聖地に。改札は、東京で使っているパスモで入ることができた。

はじめは、近鉄奈良線だった。鶴橋で、大阪線に乗り換える。

天気予報は役にたたんわ、毎日この夏いちばんの暑さいいよる。まーだ暑うなるんか、かなわんなぁ。

暑い暑いホームで、おっとりした西のやりとりをきく。ハンカチを出そうとポケットをさぐり、中指がパスモに触れた。西日のまぶしさ、おじさんたちの白い半そでシャツ。そうだった。近鉄は、なつかしい夏の電車だった。

小学一年の夏休み、祖母のところに遊びにいった。おばあさんは、ふだんは東北で身軽なひとり暮らしをしていた。その夏は、大阪の病院に勤める親せきに赤ちゃんが生まれて、お手伝いをしていた。

大阪城にのぼらせてもらったり、六甲山でお肉を焼いたり、ＰＬランドが楽しすぎて高い熱を出したりの夏休み。その一日、お出かけするよとおばあさんがいった。もうひとり、近鉄の野球選手と結婚したひとがいて、やはり赤ちゃんが生まれたばかりだった。

おばあさんが縫ってくれた、新しいワンピースを着て出かけた。いくつか乗り継いで、どこの駅だったか。きっぷを買ってもらって改札にいくと、どこも閉まっている。

ここに、きっぷをいれるのよ。おば

イラスト・岡林玲

みんてつ

CONTENTS
Vol. 54
2015

◎日本民営鉄道協会とは？
昭和 42 年に社団法人として設立、平成 24 年 4 月 1 日付で一般社団法人に移行、72 社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR 各社や公営地下鉄などは加入しておりません。

02 四つの季節の鉄道エッセイ　夏
音頭の聖地
◉作家　石田　千

特集／交流人口の創出
［点から線へ。沿線ネットワークを活かした東武鉄道の成長戦略］
04 TOP INTERVIEW
交流人口を創出し、鉄道需要の拡大を図る。
◉東武鉄道株式会社 取締役社長　根津嘉澄

08 REPORT I
東京スカイツリータウンに始まる新たな沿線の姿
◉東武鉄道株式会社 経営企画部長　横田芳美
◉東武鉄道株式会社 鉄道事業本部 営業部長　石附栄一

16 INTERVIEW
拠点性を高め、市の魅力向上を目指すまちづくりを推進
◉春日部市長　石川良三

18 INTERVIEW
豊かな観光資源を活かして、魅力輝く「世界の日光」であり続ける
◉日光市長　斎藤文夫

20 REPORT II
5社相互直通運転で新たな流動をつくる
◉東武鉄道株式会社 鉄道事業本部 計画管理部長　髙野寿久
◉東武鉄道株式会社 鉄道事業本部 東上業務部長　眞島　朗

24 INTERVIEW
5社相互直通運転を追い風に、「時薫るまち川越」の観光施策を強化
◉川越市長　川合善明

26 みんてつだより
富山地方鉄道
市内電車が北陸新幹線高架下に乗り入れ開始
北陸鉄道
石川線に新駅「陽羽里駅」が開業
四日市あすなろう鉄道
内部・八王子線が「公有民営方式」で運行再出発

28 連載㉒ 地方民鉄紀行
三岐鉄道株式会社

30 連載㉜ 大正・昭和の鳥瞰図絵師　吉田初三郎の世界
黒石市／県立公園大鰐温泉郷
◉首都大学東京非常勤講師　藤本一美

あさんが通った。こわごわまねすると、ばたんとあいた。びっくりするうちに、ばたんと閉じた。きっぷだけ通過して入れず、暑い暑い駅で、泣きべそをかいた。生まれてはじめての、自動改札だった。

あの駅は、どこだったのかな。まんまる顔の、おおきな赤ちゃんだったな。ひと駅着くたび、窓にでこっぱちをくっつけてみた。

河内音頭記念館は近鉄八尾駅の長い商店街にあり、地元出身の音頭取り河内家菊水丸さんが館長をされている。

河内音頭は、北・中・南三郡の河内のさまざまな民謡の総称で、八尾の常光寺は、もっとも古い正調流し節発祥の地とされている。

夕暮れの境内に、ちょうちんが灯る。櫓には五色の旗とたくさんのうちわが飾られ、ご先祖様をお迎えするしたくがととのう。

門外不出の正調流し節は、ご住職も音頭をとられた。ゆったり朗々と、現代の音頭とはずいぶん違う。つづいて菊水丸さん、地元久乃家一門がつぎつぎ櫓にのぼり、老若男女の輪は、ふたえ三重となっていった。

二時間ほど、見よう見まねで踊って、商店街のお好み焼きの店に入った。

生ビールのジョッキをにぎって、常連さんたちと乾杯する。踊りっぱなしでくたくたですというと、わしらの若いころは、一晩じゅう踊ったもんやで。

おじいさんが笑う。仲間のみなさんたちも、うなずく。そうしてお店は、だんだんにぎやかになる。

いしだ せん
エッセイスト、小説家。福島県生まれ、東京育ち。國學院大學文学部卒業。2001年『大踏切書店のこと』で第1回古本小説大賞を受賞。2011年『あめりかむら』で、2012年『きなりの雲』で芥川賞候補。著書に『きつねの遠足 石田千作文集』『もじ笑う』『夜明けのラジオ』など。最新刊に『唄めぐり』がある。